



ゾンビ感覚

牛牛

私はやっぱりゾンビになったのだろうか。ちょっと咬まれただけでうつったのか？でも、少し傷になって血が出たけど、たいして痛くないし、気分が悪くなったりもしていない。凶暴になんてなっていない。

私は、だいじょうぶ！と思える理由をさがしてあれこれ考えつづけた。咬まれてすぐに傷口に消毒薬をつけたし、咬みついてきたヤツはそもそもゾンビの感染者じゃなかったかも……。

いや、ちがう！小さな子供だと思って油断したけど、あいつはきっと感染者だ。灰色の顔と吊り上った目がゾンビそのものの姿だった。あいつに咬まれたからには、私もゾンビになったのだ。

帰り道でずっとゾンビに襲われないか、ビクビクしながら歩いてきて、日暮れ前の明るいうちによろやく家の玄関の前に辿り着き、ホッとしたところに、あいつがトコトコッと近寄ってきて、虚をつかれたのだ。

紺色の幼稚園の制服を着て小さなリュックを背負った男の子が、私の腕にとびついて咬み付こうとしてきた。

ゾンビだ！と思って、とっさに横によけたので腕は咬まれなかった。突進してきたこどもゾンビは空をつかんで地面に倒れこんだ。そしてすぐに横っ飛びして、私の足首にとりついてカブッと咬んだのだ。

私は持っていたバッグで、こどもゾンビの頭や背中をバンバン叩いたが、全然はなれない。咬まれていない方の足で、引き剥がすようにドカドカ蹴りつけると、やっとはなれた。それから、こどもゾンビはタタタッと走り去った。

家に入って私は呆然としたまま、足首を洗ったり薬をつけたりした。家の中は私ひとりだけだ。母と娘ふたりだけの家族だけど、お母さんはずっと帰ってこない。ゾンビがらみの騒乱のせいで、お母さんの勤め先の会社は火事になったらしいのだが、安否がわからないまま一週間が経ってしまった。騒乱のあった地区は立ち入り禁止になり、インターネットも電話も使えなくなっているし、どうやってお母さんをさがしたらいいんだろうか。一人きりの家はしーんと静かだった。

咬まれた足を見てみると、左の足首の外側にこどもゾンビの歯型の点点が紅くポツポツと楕円の形に浮きあがっている。少しチクチクするだけで、痛みはそれほど強くない。でも、きっとこれからだんだんゾンビになっていくのだろう。もうすぐ、灰色の顔と吊り上った目をして、人間を襲って歩くようになるんだ……。

私は床につつぶして大声をあげて泣いた。あとからあとから、うおーんうおーんという声がおなかからわきあがってきてとまらない。ゾンビになるのはいやだよ！お母さんはどうして帰ってこないの？うおーんうおーん。これが号泣というものなんだ～。

外へ出かけたりしなければよかった。シューサクの家に相談に行くなんて、おろかだった。

冷たく追い払われて、ゾンビが潜んでいる街中を歩いて帰ってこなければならぬなんて。

彼氏だの彼女だの、まったくばかばかしい。弁当を作って来いだの、髪を短く切るのはダメだの、えらそうにいはられて、今までシューサクのために使った時間が惜しい。

もっとお母さんを手伝ったり、勉強したりすればよかった……。うおーんうおーん。

泣き疲れて、いつのまにかうとうととねむってしまったらしい。目覚めるともう日が暮れて部屋が真っ暗だった。手探りで、スイッチを押して部屋の灯りをつけようとしたが、つかなかった。停電しているのだ。

のどがすごくかわいている。冷蔵庫を開けたらその中也暗かった。まだ冷気は残っていて、手探りでそーっとマグカップに牛乳をついで飲んだら、けっこう冷たくておいしかった。このままずっと停電が続いたら、中に入っているものがダメになるな、と思うともったいない気がして、１リットルパックの牛乳をゴクゴク一気に全部飲んでしまった。５００ミリリットルパックのヨーグルトも開けて食べてしまった。つい大食いしてしまうのは、体がゾンビ化しているせいなのだろうか。

足首と顔がどうなっているのか確かめたくなくて、懐中電灯をだしてきた。足首を照らしてみたが、傷は変わりはない。洗面所の鏡に顔を映して見ると、泣いたせいでまぶたが赤くなってふくれているのがわかるだけで、顔色が灰色になっているかよくわからない。目はつりあがっていないから、ゾンビの顔にはなっていないんじゃないの？

そもそも、どういう状態になったらゾンビといえるのだろうか。

怪力で攻撃的なゾンビたち。ゾンビはどうして人を咬むのか。咬まれると、どういうしくみでゾンビ化するのか。ゾンビはほんとに感染症なのか。ゾンビについて調べようとした人間は皆、自分たちもゾンビになってしまった。ゾンビ被害が余計に拡大するので、ゾンビ研究は禁止されてしまったのだ。

ゾンビへの対処法は火で焼くことだけだ。この町も、ゾンビが出現したのだから、封鎖されて徹底的にすべて焼き払われるのだ。ゾンビじゃない人間がのこっていても省みられることはないだろう。

私はお母さんの帰りを待っていて、町を脱出しそこねてしまったのだ。シューサク一家も逃げ遅れたくちだけれど、あの人たちはどうも地下シェルターにかくれて、ゾンビ焼き打ちの日をやり過ごすつもりらしい。

シューサクとその家族は、私にいっしょに避難しようとはいわなかった。とるにたりない私のような人間に、水や食料を分けるのがいやなんだろう。私はあの人たちになめられているからね。

シューサクは威圧するように、ことばだけはもっともらしく、私に言った。

「ミヤコちゃん、今は何もできないし、家でお母さんを待つのがいいと思うよ。日が暮れる前に帰ったほうがいい。」

これほどイヤな奴だったとはね。

思い出すと、猛烈にくやしくて、また涙がでてきた。でも泣くのはもう飽きたので、顔を洗ってさっぱりすることにした。水道は使えるようだ。

いつも使っている自分のじゃなくて、お母さんののを借りてみた。クチナシの花の香りがする洗顔フォームを念入りに泡立てて顔を洗い、ふわふわの柔らかいタオルで顔をふくと、気がせいせいした。

そうだ、冷凍庫の中には、買い置きのアイスクリュームがあったはず。溶けないうちにあれも食べてしまおう。

……。突然、背後のトイレから、ジャーッと水を流す音が聞こえてきた。私はビクッと飛び上がりそうになった。誰がいる……？

勝手にトイレの水が流れるなんてことないよね？お母さんが帰ってきたのならうれしいけど、これはちがう気がする……。

侵入者、泥棒、痴漢、変質者、ゾンビ……。不穏なことはいろいろ頭の中をぐるぐるかけめぐって、心臓がドキドキした。

さっそく戦わなければならないのか。まだなまなりのゾンビなのに。

身構えてトイレのドアをジッとにらんでいると、コトリとドアを開けて出てきたのは、家の外で襲ってきたあのこどもゾンビだった。いつのまに、どこから入ったのか。明かり取りの小窓からかなあ……。

こどもゾンビは用を足した後、行儀よくちゃんと手を洗ったけれど、身長が低いので、かかっている手ふきのタオルに手が届かなかったんだらう。自分のポケットから白いガーゼのハンカチを出して手をふいている。ハンカチの端には油性ペンで、「タロウ」と名前が書かれている。

タロウくんもゾンビのなりかけなのだろうか……？襲ってきたときのような凶暴さが今はないみたいだ。

私とタロウは、つつ立ったまま見つめ合った。相手が攻撃してくるかどうか互いに探り合ったのだ。

私にはタロウはおとなしく落ち着いているように見えた。むこうも、私のことをあまり危険ではないと思ったようだ。私とタロウは互いに警戒心を少しゆるめた。

「ねえねえ。きみはタロウくんっていう名前なんでしょう？私はユウカだよ。ケンカはやめておこうよ。」

タロウは親指を立てて腕をつきだして見せた。YESの意味らしい。タロウはしゃべることができないみたいだった。

「おなかへってるんじゃない？アイスクリームがあるからいっしょに食べようよ。」

タロウはまた親指を立ててOKのサインをした。

冷凍庫のアイスクリームはちょうど食べやすいやわらかさになっていた。

初めは小さなガラスの器にとりわけて食べていたが、まだるっこしいので、めいめいのどんぶりに山盛りによそって食べることにした。私たちはローソクの灯りをともして、もくもくとアイスを食べた。ゾンビは人間を食べるんじゃないのか。私たちはどうしてアイスクリームなんか食べているのか。

バニラ、ストロベリー、抹茶の三色の山をスプーンで掘りすすめていくと、甘い香りが胸いっぱいになり、私とタロウはうっとりとした。

そして、6リットルのアイスクリームを全部食べてしまった。ああ、うまかった。私は何だか気が抜けてぼんやりしてしまった。

タロウは、自分のリュックの中から、だいじそうに本を出してきた。ナルニア国物語の『ライオンと魔女』だった。その本は細かなキズや折じわがたくさんあって、くりかえし読んだことがうかがえる。タロウのお母さんかお父さんに読んでもらっていたんだらうか。タロウは親とはぐれた迷子なんだらうか……。

本の表紙には、女の子とフォーンが相々傘で雪の中を歩く絵が描かれている。タロウは本を開いて、小さなひとさし指でつんつんとさししめした。私に、読んでくれと言っているようだ。

私は、ナルニアのこどもたちがビーバーと出会う場面を朗読した。いつのまにか口がよく動かなくなっていて、「ビーバー」がどうしても「ミーマー」になってしまうし、たびたびつかえてしまう。

でもタロウが、耳をすませて一心に聴くとてもよい聴き手なので、気持ちよくどんどん読みすすめていった。

そのうちタロウは、ソファでネコのように丸くなって眠ってしまった。私はタロウに毛布をかけてやって、『ライオンと魔女』をリュックとならべておいた。

火をつけたまま眠りこんでしまったら危険なので、ローソクは消した。でも、真っ暗になっても、私はちっとも眠くならなかった。

私は真っ暗な部屋で、これからどうしたらいいんだか……、考えてみた。

このままこの家にいても、すぐゾンビ焼き打ちの日になってしまう。シューサクー家のようにシェルターに逃げ込めたらいいんだけど……。

そうそう、あそこにあったよ。

私は小学生の頃、お母さんといっしょに、ＤＶから逃げてきた女性のための施設にしばらくいたことがあるのだ。その施設はＤＶ被害女性のシェルターとよばれていたけど、施設の地下には文字どおりの頑丈なシェルターがあって、数ヶ月分の食料や水その他生活必需品が備蓄されていた。どういう状況を想定してつくったんだろうかね……。

とりあえず、あの女性シェルターに行ってみよう。タロウと二人で母子のふりをすれば、きっとすぐに入れてくれると思う。

夜が明けたら、出発しよう。タロウはいっしょに来てくれるかな。

そして、ようやく私も毛布にくるまって、眠りにつくことができた。

朝になった。太陽の光がまぶしかった。

朝食は、パンとチーズと桃の缶詰にした。缶を開けていると、タロウも起きてきた。

もくもくと食べ、桃の缶詰の甘い甘いシロップを飲み干したところで、タロウに女性シェルターにいっしょに行くか聞いてみた。断られるかもしれないと、ドキドキしながら、動きにくくなっている口で

「かくれるのにいい場所なんだジョ。食べ物もあると思うんだ。いっしょに行こうジョ。」

と言うと、タロウはぴょんと立って、お遊戯の振り付けのようにゆったりと両腕を頭の上にあげて、丸の形をつくってみせた。ＯＫなんだね。

私たちは大急ぎでしたくを始めた。

町じゅうどこも危険だ。ゾンビは主に夜なかに活動するけれど、明るい時間に出てこないとも言いきれないのだ。ゾンビがゾンビを襲うかわからないけど、用心にこしたことはないだろう。

それに今のような混乱した状況では、ゾンビじゃない人間にも荒ぶるヤツがいっぱいいる。私たちのようにゾンビになった身では、そういう荒っぽい人間の方が怖ろしいかもしれない。

やけになっているのか、たががはずれてしまったのか、相手かまわず暴れる人間たち。

昨日、外を歩いたときにも、そんな人間たちに意味もなく破壊された建物が目についた。

せめてまわりがよく見える明るいうちに、なるべく誰にも会わないで、さっさと女性シェルターへ行くのがいいと思う。それには、なんとなく午前中が一番安全のような気がするのだ。

私はタロウの母親のように見えるように、いつもポニーテールにしている髪を、首のうしろあたりの低い位置で結って地味な感じにした。洋服もお母さんのセーターとスラックスを借りた。

いつも使う手提げバッグはやめて、古いデイパックに、残っていた缶詰全部とペットボトルにいれた水をつめこんだ。背の低いつぶあんの缶はショートコートのポケットに入れた。悪いヤツがきたら、これを武器にして殴ろうと思う。

タロウのリュックには、自分で開けられるように紙の包装のビスケットとキャラメルと水をつめた水筒を入れておいた。

灰色の顔色を誤魔化すために私とタロウはファンデーションと頬紅を少し塗った。顔をかくす花粉症用の大きなマスクも用意した。

バイクがあればよかったのに。バイクなら襲ってくるヤツを簡単にふりきれるだろう。私はピザ配達のアルバイトのためにバイクの免許をとったのだ。お母さんの通勤用のスクーターはお母さんともども帰ってきていないし、私の通学用の自転車さえも盗られてしまっていない。

お店に行けば配達用のバイクがあるかな？いや、自転車だって盗られるのにバイクなんてのこっていると思えない。

それに黙って借りるなど、どういうときにも良心に恥じることしちゃダメってお母さんに怒られるわ～。徒歩でがんばって突破するんだ！悪い人間なんか咬んでやる！

タロウと私は、荷物のいっぱい詰まったリュックを背負って歩き始めた。

家を出て少し先に、小さなクリーニング店がある。店のまえにタバコの自販機があった。その自販機のところで、二人連れのお爺さんがガタゴトと大きな音をたてている。自販機を壊しているようだ。

裂けた自販機の中からタバコをつかみだして、せっせとダッフルバッグに移している。

私とタロウは、素知らぬ顔でとおり過ぎようとしたが、背の低い方のお爺さんに、
「おい、おまえら、食べ物もってるのか？その荷物よこせ。」

と声をかけられてしまった。がらのわるい背の低いお爺さんは、タロウのリュックを後ろから引っ張って奪おうとした。

私はとっさにポケットから出したつぶあんの缶で、がらのわるいお爺さんの顔を殴った。

ゴキッという音がした。鼻の骨が折れたらしい。お爺さんは鼻を手でおさえて、エーンエーンと泣き始めた。鼻と口のまわりが血だらけだった。

私はカッとして、
「ばかものめ、めそめそ泣くぐらいなら他人の物を盗ったりするんじゃないジョ！」
と怒鳴った。

もう一方のわるいがっしりした体型のお爺さんは、チッと舌打ちをして面倒くさいという顔をした。仲間を見捨てて、ダッフルバッグをかついで、立ち去ろうとした。そばに停めた古いスーパーカブに乗ろうとしていた。

がっしりしたお爺さんがスーパーカブにまたがったところに、黒い影のようなものがかぶさった。がっしりしたお爺さんはバイクにまたがったまま地面に倒れた。

いつのまに近寄って来ていたのか、黒いジャージの上下セットを着た小太りの若い男ががっしりしたお爺さんを引き倒したのだ。這って逃げようとして
いるがっしりしたお爺さんを、黒いジャージの男は
「オイコラオイコラオイコラ……」
と言いながら蹴り続けた。酒臭かった。

この人は、べつに私とタロウを助けようとしているわけじゃないんだと思った。
チーターの獲物を横取りするライオンみたいなものだろう。とっとと逃げなければ。
私は横倒しになっているスーパーカブをそーっと起こした。セルスイッチを押してみたけどエンジンがかからないので、キックしてみたら、やった！一回でかかった。
手振りでタロウにうしろに乗ってしっかりつかまるように伝えた。二人乗りに邪魔なので、私のリュックは胸の方にまわしてベルトで固定することにした。
。
リュックを持ち直してベルトを留めていると、オイコラ男が私たちの方に腕をのばしてちかづいてきた。
しまった、逃げ遅れたと思ったけど、カーンという音がして、オイコラ男がうっと額をおさえてうずくまった。タロウがすばやくスパム缶を投げつけたのだ。
「タロウ、出発するジョ！しっかりつかまってね！」
タロウは腰痛コルセットみたいにギュッと腕をまきつけた。よし、しっかりつかまってるね。私たちはいきおいよく走りだした。
お母さんごめん、他人のバイク勝手に乗っちゃった、非常事態なんだよ。

うん、だいじょうぶ、ちゃんと走ってる。コケないようにきをつけていこう。

燃料計をみると半分くらいあるし、女性シェルターまではもつだろう。思っていたよりあそこに早く着けそうだ。

ほっとしていると、ミラーに黒い大きな塊が映っているのが見えた。後ろをふりかえると、黒のエルグランドがぐんぐん近づいてきている。きっとオイコ
ラ男が追いかけてきたんだろう。酒酔い運転だからか、ふらふらと蛇行している。

このままだと、すぐ追いつかれてはねとばされてしまいそうだ。

自動車が通れない細い道に入りたいんだけど。細い道でも、行き止まりになってるのはダメだ。

考えているうちに、たちまちエルグランドに追いつかれてしまった。オイコラ男は、ホーンを鳴らしたり、ヘッドライトでパッシングしたり、私たちをお
どそうとした。

バイクの左側にまわりこんで並走して、運転席の窓から、ビールの空き缶やスナック菓子の食べたあとの袋などをこちらに投げつけてきた。汚いヤツ。

やっぱり、オイコラオイコラオイコラ……と言いながら。語彙の貧困なヤツ。

ふだんはすごく混んでいる国道には、今は私とタロウのスーパーカブと、オイコラ男のエルグランドしか走っていなかった。信号もうごいていなかった。

ところどころに破壊された車や、燃えて黒焦げになった車がおきざりにされていた。

歩道を歩くひともいない。道路沿いの建物にも人の気配がない。皆もう町を出てしまったのだろうか。

だれもないなら、空いているところは反対車線でも歩道でもどこでも走ってもいいんだ。

酔っ払いの車なんかふりきってやるんだ！

私は、車道も歩道も店の駐車場も空いている地面を全部使って、スピードは速くないけど、ジグザグ走行したり、ぐるぐる何度もおなじ所を円を描いて走ったり、Uターンを繰り返したりした。

うしろのタロウを振り落としてしまわないか心配だった。でも、タロウは野原の草の実のヒツキモツキのようにしっかりと背中にくっついていくれた。

追いかけてくるエルグランドはスーパーカブほど小回りがきかないし、運転者はよっぽらいだし、ガードレールや障害物にガリガリと車体を擦りながら走っていたが、やがてファミレスの前の植木の茂みにつきささったようになって動かなくなった。

私とタロウは、国道から脇道へ出て、川沿いの土手の上の道へ走っていった。もし、またオイコラ男のエルグランドが追ってきても、すぐ住宅地の細い路地に入れる。このまま川上の方へ向かえば、女性シェルターまで行けるはずだ。

しばらく走っていくと、土手の下の遊歩道や細い路地に、歩いている人たちがいるのに気づいた。しかし、近づいてみると、それはヨロヨロと進むゾンビの群れだった。群れのなかに人間はいないかと、見回すと、ゾンビに捕まってちょうど食われている最中の人間はいた。おぞましい光景だった。

ゾンビたちは均等な間隔を保って、ヨロヨロとあるきつづけている。私とタロウには無関心だった。

やがて女性シェルターに着いた。小学生の時以来だけど、すぐにわかった。古びているけれど、以前と外観は変わりがなかった。二階建ての白い四角い建物も敷地の中にある小さな野菜畑もむかしとおなじだと思った。

しかし、町外れにあっていつもさびしい雰囲気のところだったのに、今日は建物のまわりと前の道路にびっしりと自動車が駐車されており、がやがやとした人の声が聞こえるのが異様だ。

窓やベランダを見ると、建物の中には人がいっぱい満員電車のように押し合いへし合いしている。女性シェルターなのに、大人の男がいっぱいいる。地下シェルターに入れない人や建物にも入れない人が大声をあげたり、扉や窓を叩いたりしているのだった。

私と同じように、地下シェルターを当てにしてやってきた人がこんなにたくさんいたのだ。そしてこの人間たちに引き寄せられてゾンビたちもここへあつまっている。

私とタロウはもう女性シェルターに入れてもらえそうにない。建物に近づくことさえ難しい。だれかが敷地に入ると火炎瓶や火のついた矢が飛んでくる。散弾銃を撃ってくる人間もいた。

ここはあきらめて他の場所をさがそうか。銀行とかデパートはどうかな、そこも満員かもしれない。とにかく入れそうな頑丈な建物をさがしてまわるしかないよ。

スーパーカブは、私とタロウが降りて女性シェルターの方を窺っているあいだに、誰かに乗っていかれてしまった。もともと他人のバイクなんだし、しかたないね……。

私とタロウはしょんぼりしてしまった。

突然、火の矢がシュッと飛んできて、タロウのリュックに刺さった。あっというまにリュックは炎に包まれ、タロウの髪の毛にも燃え移った。私は燃え上がるリュックをひきはがして地面に放り投げた。タロウにすぐ水をかけてやらなきゃ！

でも、私がデイバックからペットボトルの水をとり出すよりもいちやく消火剤をタロウの頭に噴射してくれた人がいた。髪についた火が消えると、ころがったリュックにも噴射して火を消しとめてくれた。

タロウは消化剤の白い粉だらけになった。タロウは頭に火がついたり消化剤まみれになったことより、リュックが燃えたことがショックであつたらしい。「じゃー（いやー）！！」

と叫び声をあげてリュックのそばにかけようとした。私はその人の方を見たら、黒っぽい上下の作業服のようなものを着ていたので、またオイコラ男が来たのかと思って、一瞬ギクッとした。

そして、なんだ、オイコラ男じゃなかった、と思ったところで、そのやせた背の高い男はピアスの穴あけ機みたいなものをさっと出して私とタロウの肩にあててつづけてばん、ばんと打った。

すぐに私とタロウは体がまったく動かせなくなった。木偶のように、鳴子こけしのようになって、やせ男とその部下らしい男にずずずと地面をひきずられて運ばれていった。

まわりには、人がおおぜいいるのに、私とタロウがやせ男たちに連れ去られるのを誰も気に留めなかった。

見えるし聞こえるのに体は動かないのがおそろしかった。身をよじったり、ふるわせたりできれば気がまぎれてこわさが減るんじゃないかとおもった。叫べたらどんなにせいせいするだろう。

私とタロウは病院の患者のような体裁で毛布をかけられて担架とかストレッチャーに載せられてはこばれているようだった。

自車でヘリポートのある場所まで移動して、ヘリコプターにのせられて遠くへいくらしい。

ヘリコプターの到着を待つあいだ、やせ男が私たちに話しかけてきた。

「安心しろっていわれても無理だろうけどね、身体的な苦痛は与えないからね、だいじょうぶよ。」

と言って、やせ男はにこっと笑ってみせた。白い歯を見せたさわやかなキラースマイルが自慢の表情であるらしかった。でも額にぷくっとたんこぶがふくれているのがまぬげだった。

麻酔をうたれる直前にタロウがチェリー缶を投げつけたのが命中したのだ。片方のまぶたもはれて内出血している。やせ男は手鏡に自分のこぶを映して見て、あ、こんなに……とニコニコしていた。全くうらめしそうな顔をしないことには感心できるかもしれない。

「君たちはね、半ゾンビなの。半ゾンビの人たちは皆じぶんはゾンビになったと思って苦しむんだけど、実際はゾンビじゃないの。咬まれてもなぜか完全にはゾンビにならない人たちがいて、それが半ゾンビなのよ。」

えっ、そうなの。

「ヨロヨロとしか動けないのがゾンビなの。君たち半ゾンビは、さっさと動いててふだんより機敏なほどでしょ。」

ふ～ん。

「私たちの研究所は半ゾンビを調べることで、人間のゾンビ化の解明をしようとしているの。それで君たちに協力してもらいたいの。」

無理やり連れ去っているのによく言うよ。

「不本意だろうけど、母子の生活もしっかり保障させてもらうからね、何とか受け入れてもらいたいの。」

やせ男はうれしそうに母子ということばを強調して言った。やせ男は私とタロウが親子だと信じているらしい。女性シェルターには入れてもらえなかったけど、やせ男たちには親子のふりが通じたんだな……。

「タロウくん、ナルニア国の本ね、少し焦げたけど、無事だからね、しぶついの袋に入れたからね、麻酔からさめたら見てね。僕はこう見えても麻酔専門の医者なんだよ。しっかり管理するからね、だいじょうぶよ……」

……。そして深い沼に引き込まれるような眠りに落ちていった。

私とタロウがいる研究所は小さな島にあった。どこにあるかはわからないけど、冬になっても、よく晴れた日はTシャツだけで過ごせるくらいあたたかい気候だ。日本国内ではあるみたいだ。

しじゅう、機密だからね……といわれて、くわしく説明してもらえないことが多くて窮屈だった。

細切れの話をつなぎあわせて、こういう事なのかな、と考えるばかりだ。

ゾンビ化には、変性したたんぱく質が関係していて、そこに牛乳のたんぱく質が加わると、ゾンビ化の進行を遅らせることができるとかできないとか……。

とにかく半ゾンビの研究には乳製品で有名な多国籍企業がお金を出しているらしい。私とタロウは、毎日アイスクリームを食べている。

タロウは話せるようになった。じつは、おしゃべりな男の子だったのだ。一日中、「あのねあのね……」と誰彼かまわず話しかけている。私の口のこわばりもなくなって、もとどおりになった。

それがアイスのおかげなのか、強いストレスがなくなったからなのかよくわからない。

私とタロウが親子ではないことは、検査されてすぐに判明した。

「君たち、とても息が合っていたからね、親子なんだと思ったんよ……。」

と言って、やせ男はひどく落胆していた。親子の半ゾンビが研究のために重要であってさがしているらしい。やせ男は最初タロウに目を付けて、時間がたっても完全なゾンビにならないことを確かめていたのだ。タロウのリュックに発信機をつけて追跡したらしい。小さな子に私もくっついてきたので、こりゃ親子だ、と思ったんだろう。

ずっと“はじめてのおつかい”みたいに観察されていたんだな……。

「マア、また、さがしてみるよ〜。」

と、やせ男はすぐ立ち直った。やせ男は半ゾンビハンターなのだった。私とタロウが麻酔からさめて回復するのを確認してから、島を出ていった。

勉強をしたいという要望を出してみとめられたので、私とタロウは取り寄せた参考書で毎日勉強もしている。ここには、いい学校をでている人がいっぱいいるから、質問する相手には不自由しない。

いつかここを出て行けるように、いつでもここを出て行けるようにしておかなきゃ、と思う。

とりあえず今はアイスを食べながらじっくりかんがえていよう。

「ユウカちゃん、あのねあのね、今日のはシロクマアイスだってよ〜。」（終）

ゾンビ感覚

<http://p.booklog.jp/book/62175>

著者：牛牛

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/polenta/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62175>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62175>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ